豊島與志雄著『高尾ざんげ』解説

太宰治

私は先夜、眠られず、また、何の本も読みたくなくて、ある雑誌に載っていたヴァレリイの写真だけを一時間も、眺めていた。なんという悲しい顔をしているひとだろう、切株、接穂、淘汰（まびき）、手入れ、その株を切って、また接穂、淘汰（まびき）、手入れ、しかも、それは、サロンへの奉仕でしか無い。教養とは所詮（しょせん）、そんなものか。このような教養人の悲しさを、私に感じさせる人は、日本では、（私が逢った人のうちでは）豊島先生以外のお方は無かった。豊島先生は、いつも会場の薄暗い隅にいて、そうして微笑していらっしゃる。しかし、先生にとって、善人と言われるほど大いなる苦痛は無い

のではないかと思われる。そこで、深夜の酔歩がはじまる。水甕（みずがめ）のお家をあこがれる。教養人は、弱くてだらしがない、と言われている。ひとから招待されても、それを断ることが、できない種属のように思われている。教養人は、スプーンで、林檎（りんご）を割る。それにはなにも意味がないのだ。比喩（ひゆ）でもないのだ。ある武士的な文豪は、台所の庖丁（ほうちょう）でスパリと林檎を割って、そうして、得意のようである。はなはだしきは、鉈（なた）でもって林檎を一刀両断、これを見よ、亀井などという仁（じん）は感涙にむせぶ。

どだい、教養というものを知らないのだ。象徴と、

比喩と、ごちゃまぜにしているのである。比喩というものは、こうこうこうだから似ているじゃねえか、そっくりじゃねえか、笑わせやがる、そうして大笑い。それだけのものなのである。しかし、象徴というものはスプーンで林檎を割る。なんの意味もない。まったくなんの意味もないのだ。空が青い。なんの意味もない。雲が流れる。なんの意味もない。それだけなのである。それに意味づける教師たちは、比喩だけを知っていて、象徴を知らない。そうして、生徒たちが、その教師の教えを信奉し、比喩だけを知っていて、象徴を知らない。ほんとうの教養人というものは、自然に、象徴と

いうものを体得しているようである。馬鹿な議論をしない。二階の窓から、そとを通るひとをぼんやり見ている。そうして、私たちのように、その人物にしつこい興味など持たない。彼は、ただ見ている。猫が、だるそうにやってくる。それを阿呆みたいに抱きかかえる。一言にしていえば、アニュイ。

　音楽家で言えば、ショパンでもあろうか。日本の浪花節（なにわぶし）みたいな、また、講釈師みたいな、勇壮活潑な作家たちには、まるで理解ができないのではあるまいか。おそらく、豊島先生は、いちども、そんな勇壮活潑な、喧嘩（けんか）みたいなことを、なさったことはないので

はあるまいか。いつも、負けてばかり、そうして、苦笑してばかりいらっしゃるのではあるまいか。まるで教養人の弱みであり、欠点でもあるように思われる。

しかし、この頃、教養人は、強くならなければならない、と私は思うようになった。いわゆる車夫馬丁にたいしても、「馬鹿野郎」と、言えるくらいに、私はなりたいと思っている。できるかどうか。ひとから先生と言われただけでも、ひどく狼狽（ろうばい）する私たち、そのことが、ただ永遠の憧（あこが）れに終るのかも知れないが。

教養人というものは、どうしてこんなに頼りないものなのだろう。ヴィタリティというものがまったく、

全然ないのだもの。

ああ、先生も、私と同様に、だらしがない。

そうして、日本で、いちばんの教養人だってさ。

最後に、末筆で失礼であるが、私は、学生時代、先生にひどいお世話になったことを、附記しておかねばならぬ。そうしてそれは、いつも、私の遠い悲しい思い出になっている。

底本：「もの思う葦」新潮文庫、新潮社
1980（昭和55）年9月25日発行
1998（平成10）年10月15日39刷
入力：蒋龍
校正：今井忠夫
2004年6月16日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。